

函館・大沼旅行（2）

7月29日（木）朝食はホテルの最上階にある市街と湾が一望できるレストランでとった。その後、函館駅前から観光バスに乗って主な見所を回った。選択したコースは10時駅前発の明治のロマンコースで 函館駅前バスターミナル、旧函館区公会堂、旧イギリス領事館、函館山ロープウェイ、五稜郭タワー（昼食）、トラピスチヌ修道院、函館牛乳、函館駅前バスターミナルで帰着は15時で、非常に効率良く主な名所を観光できた。

函館駅は新築されまだ駅前は工事中であった。駅に隣接して大小360店の函館朝市があり、カニ、サケ、メロン、タラコ、イカ、アワビ、トウモロコシ、ジャガイモなど朝5時から営業していた。観光バスは市電の走る道路とほぼ平行した道路をベイエリア方向に進み赤レンガ倉庫群や1923(大正12)年に建てられた日本最古のコンクリートの角錐の電柱(夫婦電柱とも呼ばれている)そばを通り、金森美術館、旧棧橋、新島讓海外渡航の地碑を通過して旧函館区公会堂へ進んだ。

旧函館区公会堂は1909(明治42)年起工、翌年竣工された日本人技師による洋風建物で国指定重要文化財となっている。日本人が設計したとは思えない建物であるが、おそらく当時盛んに建設された洋風建物を参考にしたものと思われる。建築材料には地元の木材が沢山使用されデザインの一部に唐草模様があり和洋折衷の立派な建物である。所在地は基坂の突き当たりの元町公園の上であり、背後に函館山の緑の木々を抱え、前方には基坂の延長線上に函館湾を望む眺望の優れた場所である。現在は大広間をコンサートホールとして使用しており市民に親しまれている。館内を一通り見て回った後、歩いて基坂を下り函館市旧イギリス領事館へ。



旧イギリス領事館は 1863（文久 3）年にハリストス正教会西隣に新築した領事館が火災で焼失、1913（大正 2）年、イギリス政府上海工事局の設計により現在の場所に建てられたと言う。上品で落ち着いた建物である。今は開港記念館として開港の歴史などが展示されている。市有形文化財。基坂を挟んでペリー提督来航記念碑がある。底から再度バスに乗り、いくつかの坂を横切ってロープウェイ乗り場へ。

函館山ロープウェイ(<http://www.334.co.jp/>)は標高 334m の函館山へ 3 分で一気に登る中間に支柱のないロープウェイである。展望台からの市街地の眺めは素晴らしい。特に、夜景は世界 3 大夜景の一つに数えられている。展望台の眼下には函館ハリストス正教会（重要文化財）、カトリック元町教会、正ヨハネ教会、東本願寺函館別院などが見下ろせた。ロープウェイを往復して山麓に戻り再びバスに乗る。バスは市街地のほぼ中央を進み、陸地が最も狭く（1km）なるところに市役所がある。その前を通過して一路、五稜郭公園の脇にある五稜郭タワーへ。



五稜郭タワーは高さ 60m あり、その展望台からは五稜郭の星形のユニークな形状をはじめ函館山や市街地を一望できる。五稜郭は、徳川幕府が北方警備強化のために 7 年の歳月を掛けて築城した日本初の西洋式城郭である。



1868（明治元）年には旧幕軍の榎本武揚や土方歳蔵らに占拠され戊辰戦争最後の激戦、函館戦争の舞台となった。NHK の大河ドラマで新撰組が放映されているためか観光客が多かった。ここで昼食をとり、次のトラピスチヌ修道院へ。

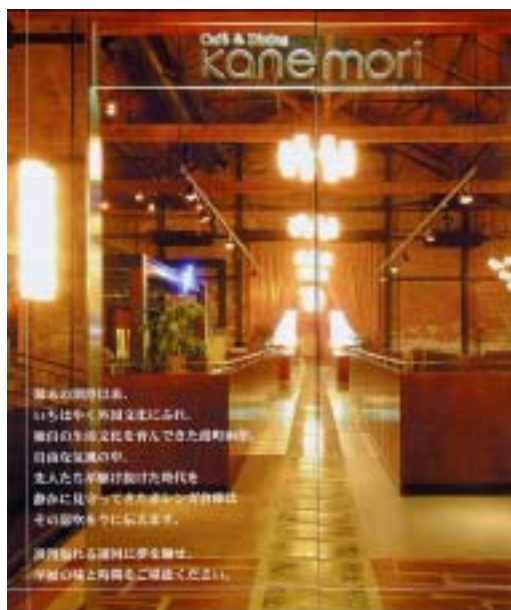
トラピスチヌ修道院は 1898（明治 31）年フランスから派遣されたカトリックシトー会の 8 人の修道女が修道生活を開始した所である。現在も修道女

たちが厳格な戒律のもとで、神への献身の生活を送っているのに、聖堂内へは入ることが出来ない。正門の前庭には聖ミカエルの像がある。丘陵地のため庭内から函館市街、函館山、津軽海峡や立待岬まで眺望できた。修道女の手作りの特製野マドレーヌやバター飴などを販売する売店があった。函館空港近くの函館牛乳へ。

函館牛乳は函館空港に隣接したところにあり、放牧場には牛が放牧され、のどかな風景であった。工場では紙パックの牛乳の重点が行われており、売店では 100 円で牛乳飲み放題、飲むヨーグルトやソフトクリームを 100 円で販売していた。帰りは函館空港の入り口を通り、湯の川温泉を通過して、大森浜にある啄木小公園の前を通り出発点の函館駅前バスターミナルへ戻った。函館と言えば石川啄木を思い浮かべる。立待岬には啄木一族の墓があるが、1907(明治 40)年 5 月 5 日から 8 月 25 日の大火で去るまでの 4 ヶ月しか住んでいなかったとのことである。また、27 歳で短い人生を終わったことを考えると一生の価値と年齢とは無関係であることを改めて思い知らされた。残念ながら時間の関係で啄木コーナーのある函館市文学館へは立ち寄れなかった。

バスでの観光後、フィットネスホテル 330 函館で荷物を受け取りタクシーでウイニングホテルへ移動した。ウイニングホテルは末広町の市電の停留所の前にあり、北島三郎記念館やウイニングホール(Art Style of GLAY)と同じ建物にあった。お恥ずかしい話ですがこのアーティストグループについてまったく知らなかったが、17 人の気鋭のアーティストが GLAY をモチーフにこのホールでビジュアルアート空間を作っていると聞き驚いた次第である。更に、GLAY が 1988 年に函館で結成され、1994 年"RAIN"でデビューしたそうで、テレビで "GLAY 10th Anniversary GLAY EXPO 2004 in Universal Studios Japan(<http://www.glayexpo.com>) が 7 月 31 日に開催され 10 万人の参加者があったということを知り更に驚かされた。2002 年 12 月に竣工したこの建物の所有者が ExcelHuman (株) (<http://www.eh.com/>) という大阪資本の会社であることと関係があるのかもしれない。タクシーの運転手の話によると数年前、地元資本がこの一帯の開発を始めたが銀行からの資金がストップし倒産、ExcelHuman (株) が肩代わりして開発を進め現在に至ったとのことである。最近温泉を掘り当て、隣の建設途中で中断したホテルのような建物も含めて引き続き開発が進められるようである。金森美術館や赤レンガ倉庫群、西波止場などベイエリア(<http://kanemori.hakodate.jp>)再開発プロジェクトの一部として今後の発展が期待される。金森倉庫の所有者は渡辺熊四郎である。1863(文久 3)年、初代・渡辺熊四郎は 24 歳のときに長崎からやってきて、その後、1869(明治 2)年、旧金森洋物店(現市立郷土資料館)・旧金森船具店(現金森美術

館)で輸入雑貨や船具の販売等、数々の事業営むかたわら函館四天王(今井右衛門、平田文右衛門、平塚時蔵)の一人として創設期の函館に数々の業績を残した。特に、社会、文化事業に果たした役割は大きく、学校や病院の建設、公園や水道施設の整備等、多くの公共事業に私財を投じた。その熊四郎がこの地で倉庫業を始めたのは1887(明治20)年、営業倉庫として函館で初めての倉庫業である。1859(安政6)年、横浜、長崎とともに日本初の国際貿易港として開港した函館。港から街は栄え、数え切れないほどの人や文化、そして浪漫が上陸し、旅立っていった。時は流れ・・・海運業盛んな頃の面影を色濃く残すベイエリアが過去と未来の交錯する新しい人々の交流の場として甦ったと言える。代々の渡辺熊四郎の果たしている役割は偉大である。同様の話は豪商相馬哲平についても言える。彼は1910(明治40)年8月の大火で焼失した住民集会所の再建に5万円を寄付した。これは総建築費約5万8千円の主要な部分となった。初代・相馬哲平は1833(天保4)年、越後の国で生まれ、28歳のとき函館の附船渡世の店で奉公した。哲平は身を粉にして働き、2年後に米穀店を開くことが出来た。函館戦争後の米価の高騰で巨額の富を得て、金融業などへ事業を広げ函館屈指の大富豪となった。晩年は公共事業に全力を傾け函館の発展に貢献した。郷土報恩の精神は現代まで代々引継がれてきた。もう一人、高田屋嘉兵衛という富豪がいる。司馬遼太郎の小説「菜の花の沖」の主人公。彼は1769(明和6)年、淡路島に生まれ函館と江戸を結ぶ航路を開き、一代で莫大な財産を築いたが、それを独占すること無く、道路の改修、開墾、植林、港内での養殖や漁具の改良など、積極的に地元へ還元した。函館の発展はこのような人々の貢献なくして語れないと思われる。



夕刻には函館西波止場と金森赤レンガ倉庫を中心に散策し、赤レンガ倉庫と隣接するベイはこだて1号館にあるCafé & Dining KANEMORIで夕食をとった。昨夜に続きすばらしい味であった。

連日、30度を越す異常な暑さである。地元の人もこの暑さは異常と言っていた。テレビによると扇風機が飛ぶように売れており品不足となっているとのことである。